
湯たんぽを見に

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湯たんぽを見に

【Zコード】

Z9381D

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

春休みをダラダラ過ごすわたしを見かねて母がおつかいを頼んできた。しかたなく外出するわたし。

セーフモードでウイルスチェックをしている間、かなり時間が空くので一階へ降り、母の夕飯の支度をしていく背中越しに、「今日、晩飯なに？」

あんた、そんな言葉遣いやめなさいよと、母はわたしが“ばんごはん”ではなく“ばんめし”というのが気に入らないらしく、ついでに普段の態度までなじり、学校が休みなのにどこにも行かず家に閉じこもってパソコンばかりいじつていることを、

「あんた一体何してんのよ、インターネットってそんなに楽しいの？」それから、彼氏でもつくりに女友達と外へ出かけてみなさいよと、ナンパされるのを容認するかのような発言の後、化粧も覚えなさいよとつるやく顔つ。

「家の中にいるのに誰に見せんのよ、別にいいじゃん」

「それよりあんたどうすんの？もう三年生でしょ？大学行くんなら、お父さんにも話さなきゃならないんだから、早めに決めときなさいよ」

「短大とかダメ？」

それなら就職しなさい。四年制じゃなきゃ後で厳しい目に遭うわよ。ただでさえ就職難だつてテレビで言つてるじゃない。

「お母さんの働いてるスーパーでわたしも雇つてもらおうかな」

母は鼻で笑い、平日でも忙しいし、休日や祝日のレジはまるで戦場なんだから、あんたなんかじや生き残れんわといわんばかりに、「こないだ高校中退した子が入ってきたけど、初日の午前中に気分が悪いからつて早退してそれっきりよ」

なんだか誇らしげに語る母は、今では古参レジの責任者であるから、わたしがそこで新人として働くことになれば、彼女は鬼軍曹……。母が職場で他のパートさん達をどのように扱っているのか容易に想像がつく。この人、どうだからなあ。

「高卒でどうか働けるんじゃないの？お父さんの「ネとかうちにはないの？」

「あるわけないでしょ、あんたその他人まかせの考えいい加減止めないと将来後悔するわよ」

母は的確にわたしの急所をついてくる。そりゃあ親子だから当然か。でもわたしの裏の顔は知らぬまい。例えば、さつきまでわたしがネットでエロ動画を見ていたことを彼女は想像すら出来ないだろう。というか、わたし何やってんだ……。

高校入学記念にパソコンを買ってもらいネットに繋いだ当初は、普通にチャットなんかやって楽しめていたのに、いつの頃からか感覚が麻痺してきてアングラな方向へ進み出すようになつた。今のわたしはまるつきり変態道まつじぐらじやなからうか……。

「あんた彼氏でも出来たら少しは変わるかもね。そんな寝癖つけたまんまゴンビニとか行く女誰も相手にしてくれないか」と一人納得したように頷く母。喧嘩売つてんのか、このやうひ。いや女郎か。

そういうえばや、さつきテレビでやってたんだけど、と母は電気湯たんぽについて語り始めた、唐突すぎるだろ。母の冷え性は相当なもので、きっと今も腹巻を一枚重ねなのだろ。風邪の時使うやつじやダメなのと訊けば、すぐさま「氷嚢のこと言つてんの」と本当にものを知らないわね、最近の子はとくる。

「あんたちょっと見てきてよ。どうせ暇なんでしょ？」

「お金ちょうどいい」

見て来てくれるだけでいいから電車賃だけねと千円札を一枚渡される。ああ、わたしを外出させたいのか、しようがない、のつてやるか。

そのまま玄関口へ向かうわたしをあわてて引き止め、あんたその格好で行くのかと、せめて寝癖は直して行けと言つ。出かける前準備だけで時間がかかる、あーあ、女って面倒だ。気合入れておしゃれする子の気が知れん。

元々、背も高く髪もショートだし、顔立ちも父親似で、男っぽい性格も災いしてか、同姓に好かれるこの多かつたわたしを好きだと言ってくれる男は未だにいなかつた。レズ疑惑まででる始末。周りの男どもはますますわたしに関心がなくなつたことだらう。いつたい、この環境の中でどうすればわたしに言い寄つてくる女の子達のような、あの可愛らしいしぐさが身につくのであろうか。这样一个女の子っぽいしぐさをするのが恥ずかしいのだからしようがない。

これ以上母に引き止められるのが嫌で、服も着替えてみる。別によれよれのトレーナーとジーンズでも構わないのだけど、そこに母のつっこみがくることは予想出来たから、以前買つてそのまま着ないでおいた奴をだす。長い間しまつておいたから折り目がついているのが、目敏い母にばれなきやいいが。

「じゃあ、行つてくる、つて湯たんぽ見てどうすんだっけ?」と言つてすぐにああこれは母の口実だつたんだと思いなおし、「値段見てくれば良かつたんだよね」

母はゆつくり見てきていいからねとわたしの方を振り向かずに包丁を小刻みに振るう。

なんだか気を使いすぎたようで、肩透かしをくらつたわたしはもう一度、行つて来ます、とわざと大きく声を出す。それにも背中を向けたまま、いつてらつしゃい、の軽い反応。ちくしょう服を選ぶ手間を返しやがれ。

最近オープンした電気量販店の入り口付近にはキャンペーンガールつていうのか、とにかく男の気を惹きそうな格好でパンフレットを渡してくるきつちりメイクの彼女達。

透明のビニール袋からポケットティッシュが覗けたので、つい、渡されたものすべてをもらつてしまつた。性格は母親似なわたしがうらめしい。わたしがもてないのつて母のせいなのでは。

エスカレーターで一階に昇るとその先にもパンフレットを手に待ち構えるお姉さん……

わたしの両手はもうふさがっています。

とりあえず、最新機種の携帯を見てみる。

小さい、軽いし、値段は高い。こりや無理だ、絶対買つてもらえないだろうな。バイトしとけばよかつた。今バイトしたいなんて言つたら、アホかの一言で片付けられるんだろうな、大学受験か、憂鬱だ。

携帯のせいで気落ちしたわたしは、パソコンコーナーへと向かう。最新型は画面が綺麗だな、でも高い。これ何も疑わずに買う人達がいるんだから世の中つて裏側を知らなきゃ幸せに生きていけるんだよな。お母さんだつてよくテレビの話題をふつてくるけど、その度にいちいち突つ込みたくなる自分を抑えているわたしは間違いなくネット中毒者。わたしがもてないのはネットのせいだ、そうだ。

なんて自分を慰め、次は洗濯機コーナーへ。

すごい、なに、この最新型、ブーツも洗えるんだ。でもわたしブーツもつてないや、というか洗濯機さわったことがない。そもそもなで洗濯機なんて見てんだ。うーん、時間をつぶすのつて意外と頭使うな。次は電子レンジでも見てみるかな。

電子レンジが並んでいる台の向かいには、食器洗浄機があつた。家にあるのは乾燥だけのやつ。お母さんよく毎日やつてるよな、わたくしつて結婚したらあんな風にやれるんだろうか、そもそも彼氏も出来たことのないわたしが考えることじやないな、やめようこんな考え。

さすがにオープンしたばかりの店内にはたくさん的人がいる。そのおかげで「コーナー」ことに張り付いている店員さんに声をかけられることもなく、わたしにとつては都合がよかつた。よく大人びて見られるから、内心ビクビクして店内の店員さんの近づいてくる気配を確かめながら、商品を眺める振りをしつつ、わたしの間合いには絶対に入らせなかつた。

そろそろ湯たんぽでも見に行くか、と今更ながら湯たんぽつてコーナーあるわけないよな、と天井からぶら下がつているコーナーの

案内板を見上げる。……」たつとかのコーナーかな、そう思いとりあえずそこへ向かう。その途中で今日初めて店員さんに声をかけられた。

若い、いかにも新人といわんばかりの、戸惑いの隠せない話し方に少し安心を覚えたので立ち止まる。

制服姿がぎこちない、笑顔にも無理が見える。この店員さんなら、ちょっと話を聞くくらいしてもいいか、見た目もわたしの好みの顔立ちをしているし。わたしは、ちょっと濃い顔が好みだつたから、これがもしナンパだつたらなんて妄想をついしてしまつた。こんな人に好きです、付き合つてくださいって言われたらまず断らないな、そう浮ついた心地で何気に話を聞いていて、あれ、懸命に説明をするその店員さんの勧めている商品をよく見たら、それは焼き芋焼き器だった。

この人やつぱり新人だろうな、声かける相手を完全に間違つていいやいや、それよりも焼き芋焼き器つてなんだ？なぜわたしに……。もうどうでもいいから、これはナンパされているんだと解釈をして、その予行練習に店員さんを利用することにした。

「どうですか、一度に五つも焼けるんですよ。焼き加減も遠赤外線で適度な」

積極的にわたしに話しかける男性はこの人が人生初だろう。これがナンパだつたならと、つくづくこの無意味な出会いが悔やまれる。適当に相槌を打つて聞くだけ聞いたら帰ろつと。

「屋台の味がご家庭でもですね。ご家族での行楽にもいいですし」花見に焼き芋とな。この人ちょっと面白いかも。でも必死さが健気でなんかかわいいな、男の人に口説かれるつてこんな気持ちなんだろうか、わたしに言い寄ってきた女の子達もそういう一生懸命な表情をしてたな。告白するのつてどれほどの勇気が必要なんだろう。わたしつて本気で誰かを好きになつたことつてあつたかな。そういえばいつも自意識に負けて告白もせずに身を引くことばかりだった。断られたらとか恥ずかしいとか、そんな感情を越えていけるほ

ど好きだと言える相手つていなかつた。わたしが他の子みたいにおりやれに关心が無いのはその差なんだ、きっと。

どうですか、とまだ熱心にたかだか高校生のわたしに、勉強中のセールストークとすら言いがたい、マーカーおしゃべり程度の言葉を思い出いだすようにぎこちなく話すこの人は、確実にわたしよりも真剣に自分の人生と向き合つていて、一生懸命生きている人だ。あれ、なんか今のわたしつて恥ずかしい格好してるんじやないか。鏡が見たい。何か自分の姿を映すものがほしい。こんな風に誰かに見られるのを気にすることつて最近なかつたな。店員さんの熱心な眼差しがわたしをさらに恥ずかしくさせる。やっぱりちゃんと寝癖直してくるんだった。

「ところで、今年一人暮らしを始めたとか、そついた感じで来られたのですかね」

それでしたら、新生活者応援の「コーナーもじき」ますがと誘われ、思わず、わたしは高校生なんだと口にしてしまつた。とたんに、「ああ、そうだったんですね、すみません。失礼しました」

そう気まずそうに会釈をし、じゅづくりじうざと店員さんは離れていつた。

店内にはまだ大勢の、活気ある声や、店のイメージソングがうるさいくらいに氾濫しているのに、わたしにはぽつりと一人取り残されたような寂しさがある。わたしはここへなにしにきたんだろう。ひやかす程度に来てみれば、最後はこの言い知れぬ罪悪感。

さつきの店員さんが見えないよう慎重な位置取りで店内を歩き回り、電気ストーブのコーナー付近で、電気で温めるという湯たんぽを見つけた。

その湯たんぽの値段だけを見てすぐに店を出た。その帰りの電車の中で、ついさつさまでの出来事を思い返しながら、途中の本屋でファッショング誌でも買ってみようかな、母に見つかっただきつと今度はわたしがひやかされるんだろうなと考え、顔の紅潮する思いに、俯き加減で窓ガラスに微かに映る自分の顔を何度も確かめ見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9381d/>

湯たんぽを見に

2010年10月20日19時22分発行